

Title	イスパニア語動詞における直説法時制の二元性について
Author(s)	山田, 善郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1981, 7, p. 23-42
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97892">https://hdl.handle.net/11094/97892</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# イスパニア語動詞における直説法時制の二元性について

山 田 善 郎

言語表現が成立するためには、表現の主体になる〈発話者〉と表現の対象になる〈事件〉、それに両者の対面する〈場〉が必要である。発話者の〈発話時点〉と〈事件〉との時間関係が、文法形式に従って、〈同時〉であるか、〈前時〉であるか、〈後時〉であるか、言い換えれば、時間的存在である〈現在〉、〈過去〉、〈未来〉が言語表現の場に表出される。

本稿では、イスパニア語の基本的な、動詞の時称意義と、その体系を整理してみたい。もちろん、それぞれの時称が内包している時間の観念は、いわゆる“物理的な時間”ではなくて、“言語上の時間”であるが、言表化される過程での、行為なり、存在のかたちで捉えられる〈事件〉を時間化する場合、その“言語上の時間”は、“物理的な、或いは体験の時間”と“心理的な時間”の二元性をもっている。つまり、時間が体験に基づいて、内面からその構造と経過の有様が見通されるのは意識においてであるからである。要は、或る〈事件〉に対して表現主体がある時称形を設定する姿勢は、時間の前後関係を区別する側面だけではなくて、時間に直接係わらない別の側面も意識しているという立場から分析を進めたい。

時間の区別は、時の指呼詞のように、時称形以外の手段でも表わし得るし、法とか様態付与、或いは相の範疇とも重なり合うことが多いが、ここではできるだけこれらの関与をさけて、言表行為の具体化との関連における純粹に体験的な時間と心理的な時間の二面性における整理にとどめたい。

## I

まず、時間に係わる側面として、直説法の時称体系を単純形に限定して整理してみる。助動詞 haber と結合された複合形の時称関係は、後にみられるように、単純形とそれぞれ対応しているし、接続法はそれ自体、分割性・

未完了性を含んだ叙法のレベルでの時称体形を形成しており、直説法と同質の現在、過去、未来のいずれにも配分されていない。即ち、接続法の各時称形は本質的な時間を指定しているのではなく、むしろ動作の展開の〈相〉を示している。その上、原則的には、直説法との関連において、依存文に現われてくるのが通例であるから本稿ではとりあげないことにする。

文法的な〈時〉の対立として：

過去を表わさない形／過去を表わす形

estudio, estudiaré / estudié, estudiaba, estudiaría

i 過去を表わさない形の対立：

過去も未来も表わさない形／過去は表わさないが未来を表わす形

estudio / estudiaré

ii 過去を表わす形の対立：

未来を表わさない形／未来を表わす形

estudié, estudiaba / estudiaría

イスパニア語動詞の表示する〈時〉も純粹な言語的観念である発話者の〈現在〉を軸にして組織されている。

ここでは、Burger, Pottier によって提唱され、Lamíquiz によってイスパニア語に適用された、“actual”, “inactual” に分類する方法論とか、Weinrich の “mundo comentado”, “mundo narrado” の二つのグループにイスパニア語時制を分ける分類方法によらないで、むしろ、伝統的な Bello, Gili y Gaya の提唱する“絶対時制”と“関連時制”に二分する分類方法を手がかりとして援用することにする。従って、時間に係わる側面として、発話者に依存している時間関係が発話行為の過程で基準となるべき発話時点(H)を設け、対象(事件)との時間関係を同時(±S), 前時(-S) 後時(+S)と区別する。発話主体の発話時点と事件との同時性を表わして、H±S で記号化できる presente が中心となり、話主の〈現在〉から測る前時性H-S の pretérito perfecto simple, 後時性H+S で表示できる futuro の三つの時称形が第一のレベルとして、絶対時制のグループを組織し、そこから各々の関連時制が順次形成されていく。ただし、イスパニア語の絶対時制として、pretérito perfecto compuesto が除外されている場合がしばしば見受けられるが、その時称形が内包する意義からみて、

ここではこれをも加えて、4つの絶対時制としたい。

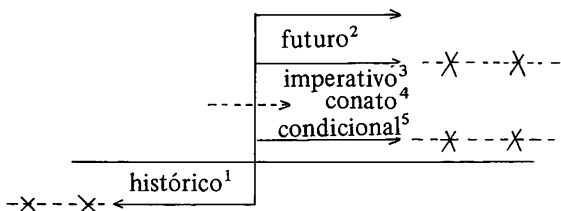
これらの関係を図示すれば次のようになる。以下複合時称形を含めて、直説法の動詞体系を順次網羅することにする。

H - S	(H ± S) - S	H ± S	H + S
pretérito perfecto simple (pretérito)	pretérito perfecto compuesto (antepresente)	presente	futuro
<i>estudié</i>	<i>he estudiado</i>	<i>estudio</i>	<i>estudiaré</i>

〈注〉 ( )内はA. Belloの時称名である。各時称間の対応関係をよく表わしている。

上図のように点線で表わした **presente H±S** は Sapir の言う直説法の *architiempo* である。〈現在〉は、“過去も未来も表わさない形”として先に定義づけられていたが、それはむしろ、無標である現在形の客観的、主観的な時間の幅は“話し手”の意識によって自由に過去と未来の境界を伸縮し得ると解釈しなければならない。物理的に言えば、〈現在〉は過去と未来を裁ち切る点であって、そこには理論的に長さが存在しないものである。しかし人間の言語では物の運動や生成において、一定の間、つまり時間的な長さを意識する。いわゆる、ベルグソンの言う“私の現在”で、“私の過去”に一方の足を残しつつ、“私の未来”にもう一方の片足をふみ入れているということである。記憶—過去—が知覚化—現在—される程度によって文法上の〈現在〉は観念的に過去へ拡がっていき、意識される時間によって弁別された——直ぐに、或いは、やがて実現される——未来は時の流れに沿って各瞬間毎に自らを実現していき、それだけ未来にくい込む〈現在〉の観念的な幅を拡げていくことになる。この点において、言語上の *comodín* として機能する現在時称は、*modo de acción* がここだけには関係する *puntual* なものから、*actual*, *persistente*, *permanente*, *habitual* な面へと時間的な幅を拡げていき、真理、公理をも含めた抽象性を帯びた無時間性をも包括することになる。同じ現在形でも以上のような、過去、未来の二方向に延びた時間の幅を包括するのと違って、発話の時点から過去か

未来のどちらかの一方向へ延長された意識の時称意義は文意上の要因に対応して、その内容を異にしている。



1. Colón descubre América en 1492.
2. Mañana vamos de compras.
3. Vas a tu casa y te acuestas enseguida.
4. Por poco me caigo.
5. Si vienes a casa, te enseñaré (enseño) las fotos.

5の例は条件節のなかでみられ、むしろ関連時制的で、帰結節との関連において常に未来を示す現在形である。帰結節では現在時称、もしくは未来時称が使用されるが、現在形が用いられた場合は話者の意識をより強調することになる。

**pretérito perfecto simple H—S** は行為が完了したものとして、話主の〈現在〉時間とはいっさい関係しない時称形である。ただ、異なった *mode de acción* との組み合わせ、例えば、

Supé que habías venido.

Sí, fue buen estudiante.

のように永続性の意味をもつ未完了の動詞との結合においては、行為の起動時点の終了を表わしたり、現在の否定を内包したりするが、ここでは、各時称形のもつ時間的な意義だけに止めているので、問わないことにする。

**futuro H+S** は話主の〈現在〉を基準にして、後時性を示し、その点においては **pretérito perfecto simple** と対立する。未来時称は完了過去単純時称と異なって、単に H+S だけではなく (H+S)±S, (H+S)+S をもこの時称形の範囲としている。要するに *anterioridad* と *no anterioridad* の対立になり、同時性、後時性は後者に含まれてしまっている。

Cuando llegues, me marcharé.

Cuando vuelvas, comeremos.

つまり、

Te lo diré al día siguiente.

は非文法的であるのに反し、

Te lo diré al día siguiente de tu llegada.

は文法的である。

この時称形は, modo de acción が完了的であれ, 不完了的であれ, 発話時点において, 行為が発話者の〈現在〉, 言い換えれば“実現”の分野にまだ入りこんでいないことを了解させる。従って, H±S を示す時の指呼詞との両立も, その範囲を出ないものである。

Vendrá ahora. (= Vendrá dentro de un momento.)

未来時称が有する後時性は, 時間に係わる未来性と, 偶発性など様態上の用法をももつが, 後者の標識を強めると未来性は稀薄になり, 偶発性などのもつ属性は〈現在〉の場に移される。

Serán las diez. (= Probablemente son las diez.)

従って, 未来の場においての蓋然性を表現しようとするならば, 語彙を添加して, それを標示しなければならなくなる。

Probablemente serán las diez (cuando llegue a casa).

因みに, この時称は, 時間的には pretérito perfecto simple と対立したが, aspecto の面では condicional simple と対立し, 後者が imperfectivo な aspecto をもつものに対して, 無標である。

**pretérito perfecto compuesto (H±S)–S** の発生時には, 助動詞“*he*”に重点がおかれて, 拡大された〈現在〉の枠組みの中で完了相をもって存在していたが, 現在は, “*he*”よりも *participio pasado* が有する意義から, 現在と関連をもつ過去のレベルで機能している。*pretérito perfecto simple* との差は, *simple* が〈現在〉と完全に関係を断ち, 客観的に言述するのに対して, *compuesto* の方は話者の現在の時間単位のなかで行われた行為を表現する。即ち話主と事件の同時性の範囲での前時性を示したり, たとえ過去の行為であっても, それが心理的に話主の現在に投影していることを示唆している。しかし, 同時性の中での前時構造は *simple* が常に *compuesto* より先行しているとは限らないで, 話主は相当幅の広い同時性でこの時称形を使用するものである。

Toda mi vida lo he creído un inútil, pero ayer me demostró su gran capacidad.

過去の事実を客観的に述べた、

La vi anoche.

は心理的に事件が発話時に最も近いところにあるとか、感じているということ聞き手に解らしめるため、容易に、

La he visto anoche.

と変えることができる。

発話時との同時性は、時には未来を示す指呼詞との共存すら認めている。

Si mañana no he recibido respuesta, iré a verte.

以上4つの絶対時称に関連する時称として、それぞれの時称形をあげてみる。先ず過去の分野から図示すると、pretérito perfecto simple H-Sを軸とした関連時制には、次のような下位区分が設定される。

pretérito perfecto simple		
H - S		
$(H - S) - S$ pretérito anterior (antepretérito inmediato) <i>hube estudiado</i>	$(H - S) \pm S$ pretérito imperfecto (copretérito) <i>estudiaba</i>	$(H - S) + S$ condicional simple (pospretérito) <i>estudiaría</i>

pretérito anterior は既に現代イスパニア語文法では殆んど使用されなくなり、pretérito perfecto simple がこれに代わっている。

二次的な下位区分としての pretérito pluscuamperfecto は本来その時称形式からしても pretérito imperfecto と関連すると考えられているが、実際は pretérito perfecto simple とも対応している。condicional compuesto は condicional simple に応ずるものである。

pretérito imperfecto (copretérito) $(H - S) \pm S$	condicional simple (pospretérito) $(H - S) + S$
$((H - S) \pm S) - S$ pretérito pluscuamperfecto (ante-copretérito) <i>había estudiado</i>	$((H - S) + S) - S$ condicional compuesto (ante-pospretérito) <i>habría estudiado</i>

過去を示す時称は当然、体験的な行為なり状態を表わしているものであるから、最も完備した時制体系を形づくっている。

絶対時制のレベルで、*presente* が基準点になっていたのと同じように、関連時制における *pretérito* のカテゴリーでは ***pretérito imperfecto*** (H-S)±S が中心になっている。ただ、基本的に異なる点は前者が対話者間の場で事件との同時性を表示していたのに対し、後者は *pretérito perfecto simple* との同時性を表現するところにある。つまり表現主体である発話者は *presente* の場合のように直接、表現対象である事件と対面する場を持つことは不可能であるから、観念的に意識の世界で過去の事件との場を設定することになる。ここに至って、はじめて話者の意識が過去の事件と同時性を有することになり、いわゆる〈過去の現在〉が成立する。もちろん発話の瞬間には現実の発話者の場へ捉えかえして表現されている。過去の事柄(H-S)を±Sの内容で述べるのであるから、原則的にはH±Sと同じ時間的な幅をもち、*imperfectivo* な相で特徴づけられてくる。

- 1 Cuando entré en su cuarto, cerraba el libro.
- 2 Cuando estaba yo en Madrid, él estaba en París.
- 3 En 1975 vivíamos en la Ciudad de México.
- 4 Mis abuelos vivían en esta ciudad.

上記の4例文とも、過去の或る時点を基準にしているが、2のように平行している二つの行為の同時性を表現することも可能であるし、3のように1975年という年の前後、メキシコ・シティに住んでいたことを表わしている場合もある。4のような文例では具体的な過去の関連時点を示していないので“antes”を過去の基準にしていると考えざるを得ないが、このような発話では *pretérito perfecto simple* と容易に交替し得る。ただし、あくまで過去の或る時点との関連において言述される以上、*presente* にみられるような没時間的な用法（真理、公理などを示す）は、“時制の一致”による使用は別として、不可能になってくる。

**condicional simple** (H-S)+S は過去からみた後時性を表現する。時間に関係するこの時称形の用法はこれに止まるとはいえ、“condicional”の呼称は必ずしも適切でないかも知れないが、Real Academia Españolaによる1973年改訂版の *Esbozo de una nueva gramática de*



la lengua española に従って直説法に組み入れ、condicional の名称を踏襲する。さて、この時称形は、先にみたように未来時称と異なり、過去の或る時点からの後時性(H-S)+Sを示すのであるが、次の文例から推しても時間に関する基準点を二つ有しているとみなす方が適当かも知れない。

Dijo que llegaría al día siguiente.

Dijo que llegaría mañana.

前者は dijo を基点にしており、後者は発話時を基準にしている。

なお、この時称がもつ不完了相の性質が時間上の限界を pretérito imperfecto と峻別することを困難にするので、両時称形の交替現象がしばしば受容されている。

Dijo que mañana saldría (salía) de viaje.

Nos prometió que dentro de unos días estaría (estaba) con nosotros.

pretérito pluscuamperfecto ((H-S)±S)-S は pretérito imperfecto の前時性を示すものであるが、現代イスパニア語では、しばしば、pretérito perfecto simple をも基点にしているケースが見受けられる。

Cuando llegó ella, ya había salido mi mamá.

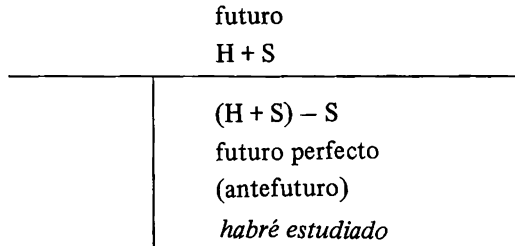
condicional compuesto ((H-S)+S)-S は condicional simple が futuro と対応していたのと同じように、この compuesto は futuro perfecto との対応をみせている。その違いは、やはり過去のある時点との関連において後時性を示している点にある。其の上、simple とちがって、文中に示されている他の時点よりも前時 -S でなければならない。

Usted me ha dicho que, cuando yo llegara a casa, ya me habría enviado el billete.

pretérito と関連する以上四つの時称を時の指呼詞を用いながら比較してみると、次のようになる。

- |             |   |
|-------------|---|
| (H-S)±S     | Me dijo que estudiaba aquel mismo día.          |
| (H-S)+S     | Me dijo que estudiaría al día siguiente.        |
| ((H-S)±S)-S | Me dijo que había estudiado el día anterior.    |
| ((H-S)+S)-S | Me dijo que habría estudiado antes de las diez. |

絶対時制の未来のレベルでは **futuro perfecto (H+S) – S** ただ一形だけが関連時称として存在する。

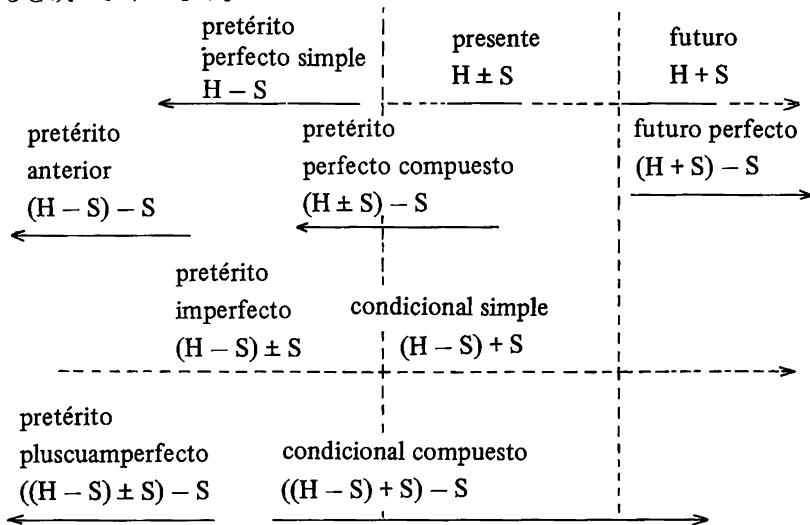


関連時制として、発話時点からみた未来の行為より以前に完了した行為なり状態なりを表わす。

**Quando llegues, me habré marchado.**

futuro の項で述べたように発話の時点よりみた未来の行為と同時、または、後時を示すにも未来形を用いる。

以上、イスパニア語直説法動詞の各時称を概括的に時間の配分で図示すると次のようになる。



## II

前項 I でみてきたように、発話行為の過程で、表現主体と表現対象との時間関係を時称体系の中で区分してきた。しかし発話者の時称設定は、このような〈時間〉と係りあう要素だけで成り立つわけではない。次の例文でも分るように、発話者と事件の時間関係が直接的につながらない文も多く見受けられる。言語が人間の精神活動の媒体であることからいっても、時称の決定は外的な時間だけに起因しているのではなく、その担い手である発話者の内的な意識(Ps)が、その場に加わってくると考えられる。

1 [ahora] Son las seis. H ± S

1.1 [ahora] Serán las seis. H ± S ← H + S

2 [ahora] Te traigo esto para ti. H ± S

2.1 [ahora] Te traía esto para ti. H - S → H ± S

3 [ahora] Quiero saber el precio de este libro. H ± S

3.1 [ahora] Querría saber el precio de este libro.

(H - S) + S → H ± S

おのおの、対になっているこれらの文は、すべて yo と tú の場で、“私の今”の時間に発話されたものである。1.1の未来形、2.1の不完了過去形、3.1の条件単純形はともに、現在形でない時称形を援用して、〈現在〉の場における発話者の心的態度を表明している。かりに、H - S が前時性を、H + S が後時性を示している限りにおいては、なんら当該時称形が有する時間の区分を損うものではない。

4 Ayer estudié mucho.

5 Mañana estudiaré mucho.

しかし、1.1、2.1、3.1のようにH - S なり、H + S がH ± S の場で表現されることになれば、文法上の時間に関する意義転換が行われることになる。要するに時称の設定は、発話時点と事件との時間関係だけによるものではなくて、時間と直接係わらない別の心理的な要素にもよるとみなされるべきであろう。

今、ここで、便宜上、María Moliner の “Diccionario de uso del español” の verbo の項で、tiempo gramatical (TG) を表わす時称形と、行為発生時を示す tiempo de acción (TA) を対照検討してみる。ただし、informal な文例は省略しているし、必要な文例が欠けている場合は

補充していることがある。その場合は当該番号に※印を付しておく。TGとTAが同一時間帯の範疇に属している文例は、ここで分析してみようとする目的に直接かかわらないのと、紙数の関係もあって省略することにする。TGとTAの異同レベルを現在、過去、未来ごとの各時称間で弁別することは比較的容易であるが、同一の時間区分、例えば *pretérito* に属する時称形どうしの間にみられる時間の意義転換には注意を要する。

### **presente H ± S**

この時称形で表わされている行為なり状態はすべて発話時との同時性を有しているのであるから、たとえ“歴史的現在”のように過去の事件を表現していても、またTAが未来に属すると思われる行為の表現であっても、“発話者の現在”における現働化であるとみなして、時称移動の対象にはしていない。

### **pretérito perfecto simple H – S**

この時称形が内包する意義から言っても、とうぜん、そこにはTGとTAのずれは見出し得ないはずである。現代イスパニア語においては *pretérito anterior* の代替時称形となるが、その間に時間関係の変動はない。

### **futuro H + S**

TGとして挙げられている未来形は直説法で6例ある。その中2例だけがTAとしてH ± Sで、1例は追加の文例である。

- 1 El trabajará mucho, pero no se nota.
- 2 Lo pagará a plazo.
- \*3 Tendrá ahora veinte años.

以上の文例のように、H + SがH ± Sの場に移動すると、Psが加わって *probabilidad* を表象する。なお、¿Podrá darme fuego?のように、TAとしては、むしろ〈現在〉に属しているともとれる用法もあるが、これは“聞き手”の意志を尊重した文で、行為の発動を未来に委ねたものとみなすのが妥当であろう。

### **pretérito perfecto compuesto (H ± S) – S**

1例だけがTAとしての未来を表わしている。

Si no ha pagado en la fecha señalada, le llevarán al juzgado.

これは接続法完了未来形が、現代イスパニア語の用法に従って直説法の完了過去複合形に代替されたものにすぎない。それ以外は過去における行為なり状態が心理的に発話者の現在と結びついているものである。要するに、発話時点との時間の遠近を指すのではなく、発話主体の〈現在〉と係わりあうという意識によるものであって、この時称が他の時称形の時間帯に移動することはない。

### **pretérito imperfecto (H - S) ± S**

(H - S) ± S から H ± S への移動は15例中、5例みられるが、1例追加している。

- 1 Nos ocultaban el Sol las montañas que se levantaban a la izquierda de la carretera.
- 1.1 Nos ocultaban el Sol las montañas que se levantan a la izquierda de la carretera de A a B.
- 2 ¿ Me llamaba usted ?
- 3 Podía llamar a la puerta antes de entrar.
- 4 Si estuvieras haciendo semejante cosa, estabas loco.
- 5 ¡ Hasta ahí podíamos llegar !
- \*6 Quería pedirle un favor.

さらに T A が未来の時間領域へ移動((H - S) ± S → H + S)している例が4文ある。

- 7 Yo era el papá y tú eras la mamá.
- 8 Yo te daba mi pelota y tú me dabas tu auto ... ¿ eh ?
- 9 ¡ Pues si que ibas con eso a sacarnos de apuros !
- 10 En ese caso, yo me iba de la casa.

ただし、7はコンテキストによっては過去における行為表現ともなり得る。T Aとして〈現在〉である6例中、1は統辞上の pretérito imperfecto 形式で、 presente 形式に書き換えることのできるものである。

**Las montañas se levantan a la izquierda de la carretera, y aquéllas nos ocultaban el Sol.**

1.1の“de A a B”のように具体的な場所を指定すれば、ふつう現在時称で表現する文である。その他の2~6の5例は H ± S の場での過去形である。

TGとしての過去形は既に過ぎ去った事件への回顧を表現している。従って、“歴史的現在”用法のように〈現在〉の視座を過去に拡大しない限り、いかなる場合もH±Sの場でのH-Sの使用は *realidad* を表示し得ない。つまり既に回顧の領域に後退してしまった行為が、H±Sの場では *realización* の可能性を消してしまって、そこに *irrealidad* の世界をつくりあげる。対話者、即ち“yo”と“tú”が *realidad* に関して言表行為をなす唯一の場は現在時称H±Sの場である。ところが“yo”が過去時称によってH±Sの場へ介入してくるということは、*irrealidad* の領域で、表現主体である“yo”が行為実現への意志を控えたことになる。つまり“聞き手”に対する“話し手”の“敬意”の標識を鮮明にする。そこから具体的には、“丁寧さ”とか“謙虚さ”、“躊躇”とか“意見の開陳”とかの話者の意識が表象化される。この場合の過去は現在に連る *imperfectivo* な時称形によらざるを得ない。

**Quiero pedirle un favor. / Quería pedirle un favor.**

**¿Puedo hablar con Ud.? / ¿Podía hablar con Ud.?**

**Debes trabajar más. / Debías trabajar más.**

また其の反面、過去時制がもつ回顧性が作用して、H±Sに於ける発話者の願望をこの時称形で表現しようとする意識も生まれてくる。

**Este niño necesitaba una paliza.**

**La verdad es que este momento sólo necesitábamos una botella de champán.**

先にTAとしての未来を述べている文が4例みられたが、7, 8は小児の遊戯の場面での発話であり、9は実現不可能を“聞き手”に示唆する皮肉を、10は条件文の帰結節で *condicional simple* に代わり、口語表現として *condicional simple* よりは条件節の行為の実現化を発話者の意志として強調する。いずれにしても、(H-S)±SのH±S; H+Sへの移行は表象的な言述、つまり虚構の世界を描き出すことになる。

### **.pretérito anterior (H-S) - S**

1例だけが過去の行為としてあげられているが、現代イスパニア語ではH-Sと交替する。

### **condicional simple (H-S) + S**

時称形発生当初にもっていた“義務”,“強制”の観念は失われて,今では  
 前望性に由来する“仮定”とか“推測”の特性だけが強調されている。この  
 時称形は,直接,時間と関係する“過去の未来”指示は別として,独特の  
 時称意義を有していると考えられる。

**Quando él llegó, serían las seis.**

では, serían は llegó との関連において使用され, eran/serían の対立  
 のまま, H±S の場に移されて, H-S+probabilidad を表示している。

**En ese caso, volvería dentro de poco.**

では, あきらかに“話し手の現在”を時の基準にしている。また,

1 ¿Podrías abrirme la ventanilla?

2 ¿Me daría un pitillo?

では, 1 の podrías abrirme = ábreme; 2 の me daría = déme と, 命  
 令形を中和した,“ていねい語”であることからみてもこの時称形は発話時  
 点を〈現在〉において,過去の或る時点となんら関係なしに使用している  
 ことが理解できる。

さらに I でみられたように, 時間と関係する用法としての;

1 **Me dijo que vendría al día siguiente.**

1.1 **Me dijo que vendría mañana.**

でも過去の或る時点を基点にして述べている場合と〈現在〉を発話時点に  
 している場合との二種類のタイプがあることが窺われる。

さて, María Moliner では9例あげられており, TAとしての現在に3  
 例, 過去に3例, 未来に3例となっている。

1 Yo querría ayudarte.

2 Podría llamar a la puerta antes de entrar.

3 Dime qué harías ahora sin mí.

4 Tendría entonces cincuenta años.

5 Prometería venir, pero no vino.

6 Podría haber llamado a la puerta antes de entrar.

7 No sé qué haría si no encontrase a nadie en la estación.

8 Yo iría de buena gana a tu boda.

9 Verías cómo nos divertiríamos.

この時称形は時間と仮定を表わす二元性を備えており, condicional, 或

いは Gili y Gaya の提唱している futuro hipòtético の時称名にふさわしく、前望的な仮定性が未完了の相とあいまって、hipótesis を標示する。

1, 2, 3 は  $H \pm S$  での TA を表現しているが, pretérito imperfecto ( $H - S$ )  $\pm S$  が  $H \pm S$  で示したのと同じように, ( $H - S$ )  $+ S$  も  $H \pm S$  の場で irrealidad の性質を表出する。

María Moliner では 1, 2 を共に probabilidad としているが, 筆者は pretérito imperfecto の用法と同じように, 発話者の意識を抑制した“ていねい語”としたい。様態の動詞である querer とか poder, deber などでは特にそうである。3 も間接疑問文での同じ用法であると思われる。因みに“ていねいさ”を深めていけば次の如くなる。

Quiero saber el precio de este coche.

Quería saber el precio de este coche.

Querría saber el precio de este coche.

Quisiera saber el precio de este coche.

4 例から 6 例までは  $H \pm S$  の場からみた過去の probabilidad を示している。未来での TA を表わす 7, 8, 9 は, 未来性が〈現在〉場において実現化の可能性を残しているという点において, probabilidad よりも,むしろ inseguridad の性格の方が強いのではないかと考えられる。

未来形の文と比較してみると;

1 Me gustará hablar con Ud. otra vez.

2 Me gustaría hablar con Ud. otra vez.

1 は“hablar”の行為の実現を予測せしめているのに対し, 2 では“hablar”の行為実現の期待を留保して不確かさを表明している。

### pretérito pluscuamperfecto (( $H - S$ ) $\pm S$ ) - S

María Moliner 所載の 5 例とも過去の行為を表わしているが, 2 例は時間に関係している文例であり, 残りの 3 例がそれぞれ ( $H \pm S$ ) - S への移動例である。

1 Me extraña que hables así, pues tú siempre te habías mostrado optimista.

2 ¿Me había llamado usted ?



### 3 Había podido llamar a la puerta antes de entrar.

1は pretérito perfecto compuesto の代替例で、口語体では他の時点との関連なしに使われて、発話時まで行為の継続していたことを表わしている。2も pretérito perfecto compuesto との交替であるが、時称の移動で irrealidad を示して、“謙虚さ”や“躊躇”を表わしている。3は pretérito imperfecto の例文3及び condicional simple の2に対応している。

#### condicional compuesto ((H - S) + S) - S

3例とも TA は過去である。María Moliner では時間と直接関係する文例は欠漏している。

- 1 Antes de eso, le habría visto tres o cuatro veces.
- 2 Habría podido llamar a la puerta antes de entrar.
- 3 Habrías visto qué jaleo se armó (si hubieras estado allí).

condicional simple との対応をみせているが、simple と異なり行為の完了を指示する。

1は pretérito pluscuamperfecto で表わされる行為に対しての推測を述べている。2は condicional simple の例文2の完了形である。3は条件文で、完了相を援用して条件節で過去に実現していなかった行為、状態に対応させて、帰結節での実現の絶対的な不可能性を示している。

#### futuro perfecto (H + S) - S

3例あげられており、TA と TG の合致は1例だけで、2例が過去の行為を表わしている。

- 1 El habrá trabajado mucho, pero no se nota.
- 2 Lo habrá dicho en broma.

1, 2とも pretérito perfecto compuesto の時称意義に“推測”を加えたものである。

以上述べてきた各時称形の、他の時間領域への移動を整理してみると; presente, pretérito perfecto simple, pretérito perfecto compuesto,

pretérito anterior はそれぞれ時間に関係するそのままの時称意義が保持されて、移動による付加価値はみられない。

〈前時〉へ移動している時称形：

1. futuro 2. futuro perfecto 3. condicional simple
4. condicional compuesto.

これらは、いずれも移動したさきの時称形がもつ時間的意義に probabilidad の移動価値が付加されている。

1.  $H + S \longrightarrow H \pm S$   
estudiaré estudio

Serán las diez.

2.  $(H + S) - S \longrightarrow (H \pm S) - S$   
habré estudiado he estudiado

El se habrá bebido hoy dos o tres botellas de cerveza.

3.  $(H - S) + S \longrightarrow (H - S) \pm S$   
estudiaría estudiaba

Sería media noche cuando llegué.

4.  $((H - S) + S) - S \longrightarrow ((H - S) \pm S) - S$   
habría estudiado había estudiado

Cuando se casó, habría ganado una fortuna.

〈後時〉へ移動している時称形：

- (1) (2) pretérito imperfecto (3) (4) condicional simple
- (5) pretérito pluscuamperfecto (6) (7) condicional compuesto

pretérito imperfecto と condicional simple, condicional compuesto は  $H \pm S$  へ移るものと、さらに、それより〈後時〉、すなわち  $H + S$  へまで移行しているものがある。  $H \pm S$  への移行は irrealidad の様態が付与されるが、さらに未来 ( $H + S$ ) へ移れば inseguridad の要素が強くなる可能性がある。

- (1)  $(H - S) \pm S \longrightarrow H \pm S$   
estudiaba estudio

Quería pedirle un favor.

(2)  $(H - S) \pm S \longrightarrow H + S$   
 estudiaba                      estudiaré  
 Yo era la mamá y tú eras el papá.

(3)  $(H - S) + S \longrightarrow H \pm S$   
 estudiaría                      estudio  
 Si vinieras, te haría un regalo.

(4)  $(H - S) + S \longrightarrow H + S$   
 estudiaría                      estudiaré  
 Sería sorprendente que mañana se presentase en casa.

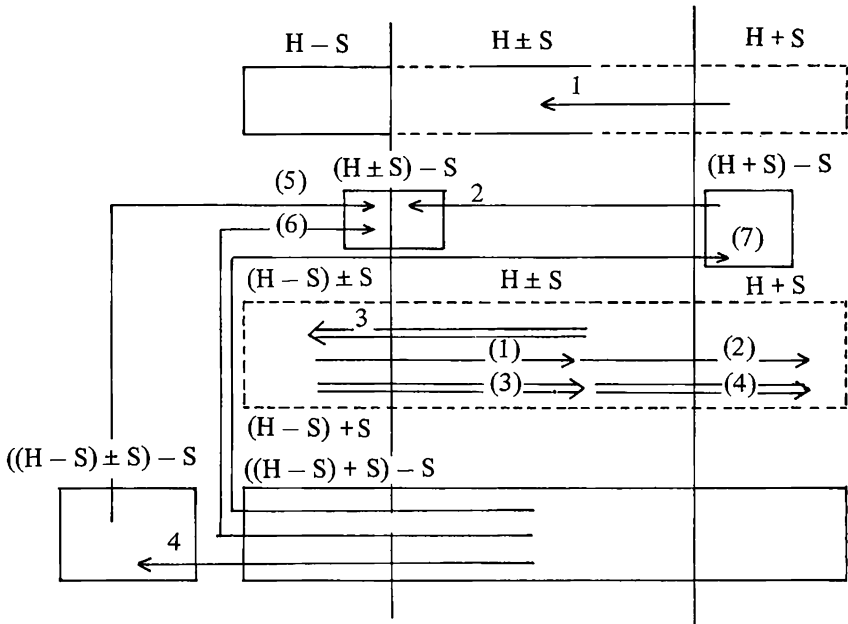
(5)  $((H - S) \pm S) - S \longrightarrow (H \pm S) - S$   
 había estudiado                      he estudiado  
 ¿Me había llamado Ud ?

(6)  $((H - S) + S) - S \longrightarrow (H \pm S) - S$   
 habría estudiado                      he estudiado  
 Habría querido pedírtelo.

(7)  $((H - S) + S) - S \longrightarrow (H + S) - S$   
 habría estudiado                      habré estudiado  
 El presidente habría reunido con los altos mandos del ejército.

〈注〉この用法は新聞の見出し語などにみられる時称形で、使用は避けるべきであるとされている。

各時称形の〈前時〉及び〈後時〉への移動は次のように図示することができる。点線は不完了相をもつ時称形の時間帯を示す。←印は前時に移動させたことを示し、→印は後時への移動を示している。数字は前出の各例文の番号を指している。⇒⇐は *condicional simple* を示し、*pretérito imperfecto* と区別している。なお、*pretérito imperfecto* と *condicional simple* の欄には、便宜上、現在及び未来の時間帯を投影させている。



上図で見られるように、〈前時〉及び〈後時〉への移動は、いずれも時称形式のレベルで単純形は単純形へ、複合形は複合形へと、それぞれ、同一相のカテゴリーの中でしか相互に移動していないことがわかる。発話者は前時時称形への移動措置、或いは後時時称形への移動措置により、動詞時称体系の中で時間測定のノルマを利用して、意識の表出に資そうとする意義転換を図っているものと思われる。

この小論はイスパニア語動詞における時称決定の要因を求めようとした一試論に過ぎない。

それには、時間にかかわる側面と、かかわらない側面から考えてみることにした。

まず、時間にかかわる側面としては、発話者の〈現在〉を軸にした四つの時間区分に分れる絶対時制の領域と、二次的にそれらの各々が下位区分

としてもつ関連時制の組み合わせからなる体系をたてて、発話時点と事件の時間関係を、同時、前時、後時の対立と関連のかたちで整理してみた。以上のような、客観的とさえ言える時間の枠組みに、時間にかかわらない側面として、時称形式の移動という方法で主観的な発話者の意識をほめ込み、時称設定の二つの要素としようとしたものである。

#### BIBLIOGRAFIA

- ACADEMIA ESPAÑOLA, REAL: "Esbozo de una nueva gramática de la lengua española". Espasa - Calpe, Madrid, 1973.
- BELLO, A. ; CUERVO, R.: "Gramática de la lengua castellana". Sopena, Buenos Aires, 5ª edición, 1958.
- GILI Y GAYA, S.: "Curso superior de sintaxis española". Spes, Barcelona, 5ª edición, 1955.
- QUILIS, A.; HERNANDEZ, C.: "Curso de lengua española". Antonio Quilis y César Hernández, Valladolid, 1ª edición, 1978.
- MARCOS MARIN, F.: "Aproximación a la gramática española". Cincel, Madrid, 1972.
- ALCINA J.; BLECUA, J. M.: "Gramática española". Ariel, Barcelona, 1975.
- HERNANDEZ ALONSO, C.: "Sintaxis española". César Hernández Alonso, Valladolid, 2ª edición, 1971.
- LAMIQUIZ, V.: "Morfosintaxis estructural del verbo español". Publicaciones de la Universidad de Sevilla, 1972.
- ABAD NEBOT, F.; FERRAZ MARTINEZ, A.; GOMEZ TORREGO, L.: "Curso de lengua española". Proyecto Alhambra, Madrid, 1980.
- SOLE, Y.R.; SOLE, C.A.: "Modern Spanish Syntax". D.C. Heath and Company, Toronto, 1977.
- ROJO, G.: "*La temporalidad verbal en español*". en revista Verba, Anuario gallego de filología, Vol. 1, pp. 68-149, Santiago de Compostela, 1974.
- ADRADOS, F.: "*Sobre el tiempo en el verbo español*". en Revista española de lingüística, Enero-Junio pp. 143-178, Gredos, Madrid, 1973.